



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	一学士からの話題提供
Author(s)	伊藤, 賀一
Citation	科学技術コミュニケーション, 35, 69-75
Issue Date	2024-09
DOI	https://doi.org/10.14943/111794
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93241
Type	departmental bulletin paper
File Information	jjsc35_08_Itou.pdf



一学士からの話題提供

伊藤 賀一¹

Topic from a Bachelor

ITOU Gaichi¹

キーワード：生涯学習、オンライン動画授業

Keywords: Lifelong Learning, Online Video Classes

1. はじめに



図1 講演の様子

いまから 20 分、お話をしたいと思います。

講演タイトルは、「一学士から」というふうにしています。世の中「学歴社会」と言われている割には、全然、学歴社会ではないと僕は思っています。「学校歴社会」なんです。東大を出たか、私の元の母校である法政大を出たか、日大を出たかとか、その差をやたら気にするんですよね。僕は海外にも友人が結構いるんですけども、日本人の官僚、外務省とか財務省の官僚が高学歴だとかよく言われますが、どこが高学歴なんだ

と。「みんなバチェラー (Bachelor) じゃねえか、学士じゃないか」と。「どうして大学院を出ていないのだ」と外国人には言われてしまうわけですよ。

本来の学歴っていうのは、ドクターなのかマスターなのかバチェラーなのか、高卒なのか中卒なのかとかっていうのが本来の学歴社会だと思うのです。私は大学は二つ出ていますが、バチェラーに過ぎない。学士です。

昨晚、札幌駅のあるお店で、打ち合わせをしたわけですが、私以外の 6 名が全員ドクター、私だけバチェラーであるという。これ、私はミーハーだからすごいですよ、快感なんです。「博士と喋ってる」とか思うと、嬉しくなっちゃったりするタイプなんです。自分一人だけちょっと毛色

2024年 8 月27日受納 2024年 8 月29日受理

所 属：1. スタディサプリ

連絡先：gaichi@silk.ocn.ne.jp

が違うので、このシンポジウムでも自分だけ毛色の違う話をするということで、「一学士から」の話題提供として受け止めていただければと思います。

(宮本) 道人さんのほうから、「何をしゃべってもらっても良い」と言われたんですけど、一応、聞きたいことがあると四つ言われたので、その四つに関連したお話を、自己紹介を踏まえながら少ししていきたいと思います。

2. どのようにキャリアを選択してきたか

まず、私は何故、予備校の講師みたいなことをやっているのかというと、元から理由がはっきりしています。私は京都出身なんですけれどね、18歳まで京都におりました。子供の時からずっと暮らしていく過程で、やりたい職業がたくさん出てきたんですけど、大まかには二つに絞られてきました。

子供の時に金八先生とか熱中時代というドラマを見てしまって、影響を受けて教員になりたいと思ったのが、まず一つ。

それからもう一つが、やはり関西人なので、やんちゃをしていると「お前、吉本行かせるぞ」と言うわけですよ。例えば、「吉本、売ってまうで」。「サーカスに売る」みたいなと同じような言葉でね、そういうふうに言われるわけです。お笑いみたいなものというのが、関西人というのは文化として染みついているものですから、「芸人になりたい」というのもあったんですよ。

このように教員と芸人を迷っている時に、ちょうど中間みたいな仕事を見つけたと思ったのが予備校の講師だったんです、実は。教員でもない。でも芸人でもない。ちょうど間みたいな仕事かな、と。

究極のところ、本当にやりたい仕事というのは、過程において、いま言った二つはやりたかったのですけれど、最終的にはものを書きたいというのがありました。しかも「空想」です。ノンフィクションではなく「フィクション」を書きたい。自分が子供の時、たくさん本を読んでいて一番の不満だったのは、「どうしてこの面白い物語が終わってしまうんだろう」ということだったのです。それは漫画とかアニメも同じ。「どうして、こんなに楽しいのに、これは終わってしまうんだ」というのがあったので、終わらない物語を書ける、という立場になりたいと思っていた。その究極の目標があるからこそ、その過程においてはリアリストでないといけないと思ったので、二つの職業の間みたいな、予備校の講師をやっていれば、人気が出れば「学習参考書や問題集を書きませんか？」という依頼が来るはずだと考えた。ここで学習参考書とかで、まあまあうまく売れていれば、その出版社の中の、例えば、書籍編集部、文庫編集部、いろんな編集部があるわけです。そこに紹介されて、違う本を書いて良いと言われるのではないかな。

で、実際、そうなります。そうしたら、最終的には文芸、要するに小説を出すというようなことが、「良いでしょう」というふうに言われるんじゃないかな、っていうのが最終的な目標だったので、それに近づいて、ようやく実は小説の企画がこないだ通りまして、70数冊本を書いて、ようやく小説を書いて良いというふうに。そう。文学賞を取っていないのに、小説家としてデビューして良い、ということになったわけですから。

いま51歳なのですが、ようやく時間をかけて、17歳ぐらいの時に決意したものというのが達成されるという形になったのですけれど。その過程で選んだ仕事なので、今回、これ歴史コミュニケーションという話なんですけれど、私、何で日本史の講師をやっているのかって、ただ逆算しているだけなんですよね。

予備校講師になるには、日本史講師になる。それはなぜかということ、京都出身だからです。「京都

出身の日本史講師というのは、説得力があるのではないか」ぐらいの感覚です。実際、出身が新選組の壬生なのです。有利だろうと。要は、世界史の講師と日本史の講師になる時に、迷いが無い。「京都だから日本史だろう」ぐらいの感じなんです。

で、「史学科に行くべきである」というふうに考えました。史学科を出ていた方が、講師になってから説得力があるから。

で、予備校の講師って、やはりローカルでやっても一番にはなれない。東京に出ないといけなかった考えたので、「では、東京のほうの大学を受けよう。史学科ばかり受けて、受かったところに行けば良い」という感覚だったわけです。

受験をしました。第1希望が早稲田の教育学部だったんですが、地理歴史専修。「どうして早稲田の文学部じゃないのか」と言われるんですけど、当時、私の世代では日本史の科目で受験できなかった。英・国・小論文だったのです。要するに小論文を使わないで、日本で一番偏差値の高い歴史をできるところっていうのが、私立だったら早稲田の教育学部だったので、早稲田の教育学部受けて、落ちて、明治には引っかかるだろうと思ったら、明治も落ちて、学習院は行けるんじゃないかな、で、落ちて法政大学の文学部の史学科に行ったのが、実は、結構正解だったのです。

どういうことかということ、法政大学の文学部というのは日本史学科がなくて、考古学と東洋史と西洋史と日本史と、全部やらないといけないのです。「あ、これはラッキー」というふうに逆に思って、前向きに考えて、そのまま進んでいって、卒業と同時に東進ハイスクールというところの講師になりました。うまいこと、たまたま入れたから良かったのですけれど。

ところが30歳ですべての仕事を辞めることになります。それはどうしてかということ、東進ハイスクールは、途中から映像の授業が始まって、私の授業は北海道の網走から沖縄の石垣島まで全部届いている状態なのに、自分を省みたときに、まだ20代です。自分は、教育業界、第三次産業の端っこである教育業界しか経験がない。なのにも関わらず、受講している生徒さんのお父さんやお母さんは様々な職業があって、いろいろな地域に住んでいて、いろいろな特色があるわけ。背景があるわけです。バックグラウンドが、何も分からないのに偉そうに授業しているのは、おかしいんじゃないかなと思ったので、東進の講師を30歳で辞めまして、第一次産業から第三次産業まで全部経験した方が良かったので、3年半ぐらい、全国各地で住み込みで第一次産業から第三次産業まで、農業とか漁業とか自動車工場とか、あとはキャバクラの店長代理とか、いろいろあります。テレクラの電話の受付とか、そういうのとかも一通り含めて、いろいろな職業をやって、34歳の時に東京に戻ってきて、講師に復帰をして、拾ってくれたのが秀英予備校という予備校だったので、それをしてしているとリクルートのスタディサプリからスカウトされたので、11年前にスタディサプリに行くという形になったわけです。

でも、またこれスタディサプリをやるようになって、東進の時は、生徒だけが授業を受けているから、まだ良かったのです。スタディサプリは大人も受けられるんですよね。あと、当時は世界中で受けられた。イギリスとかインドとかの生徒も、受けている状態です。やはり、ちょっとヤバイなと思ったのです。もう1回、勉強し直した方がよい。生涯教育学というのを勉強しようと思って、43歳で早稲田大学の教育学部、要は、25年前の第1志望だったところを、もう1回受けて合格したので、早稲田の教育学部に行って、49歳で卒業するというような形になった。ということで、大学の教育に、もう一度触れることになったのです。そうしたら、当時、自分は学生の時に気づいていなかったバチェラーとドクターの明らかな違いっていうのに気づいてしまったのですね。

史学科を出ているドクターの人たち、すなわちガチンコで歴史をやっている人と、僕みたいに自分がステップアップするための手段として歴史を選んだだけ、みたいな人との大きな違いがあるということに気づいたので、今回のこのシンポジウムで、僕自身が楽しもうと思っている。「歴史コ

コミュニケーションって、いったい何だ？」ぐらいのような感じなのですよ、僕からすると。

私は、妻が同じ学士の中央大学の史学科卒の史学科女子なんです。僕も法政大学の史学科を出ています。歴史コミュニケーションという、うちの家だと、例えば、文学部っぽい話なのですけど、例えば、チリ紙がありますよね。花粉症だからといって「ティッシュ取って」という時に、「漢書（かんじょ）取って」とか言うんですよ。分かります？ 日本史の人でないと分からないです。『漢書』地理志というのがあって、日本が最初に出てくる「夫れ楽浪海中に倭人有り」という。日本史の資料で最初に出てくる教科書のやつなのです。史学科同士だから、「ちり紙（がみ）」「ちり紙（し）」と言わないわけです。「漢書（かんじょ）」というふうに言うわけ、例えば。

あとは、「今日、梶井ある？」とか言うのです。トンカツを食べている時に「梶井ある？」と言ったら「あるよ」とか言われるのです。つまり、梶井基次郎の『檸檬（れもん）』だから。だから、「梶井」という、要するに符丁ですよ。そうやって言葉遊びをしているだけ。うちの家庭においては、歴史コミュニケーションというのは、その程度の話なわけです。要するに、「それが歴史コミュニケーションだ」ぐらいのような感覚で扱ってきたので、「歴史コミュニケーション」というものを考えたことが人生で一度もなかったから、今回のこのシンポジウムは面白そうだな、と思っているというのが正直なところです。

3. 日本史は世界史と両輪

日本史は世界史と両輪

どころか**社会科**は全て一つながり(新科目選択)

- ①**地理総合**＋地理探求 ※初の地理必修化
- ②**歴史総合**＋日本史探求※日本史と世界史は合体
- ③**歴史総合**＋世界史探求（近世以降）
- ④**公共** ＋倫理 ※公共＝現代社会
- ⑤**公共** ＋政治経済
- ⑥**公共** ＋歴史総合＋地理総合

図2 日本史は世界史と両輪

という話を前半の11分でしておいて、あと9分で、4つの話を。まず1つ目です。日本史と世界史が合体するという話です。いまの高校3年生から歴史総合という科目が出てきて、近代以降は日本史と世界史が合体することになりました。それがスライドの②と③というやつです。歴史総合＋日本史探求という受験科目で受験をすることになります。これまでは、日本史だけやっていれば受験できた。世界史だけやっていれば受験できたというのが通用しない時代に新世代はなってくるというこ

とです。

上から4段目に「近世以降」と書いてありますね。教科書を開けてみたら、近世以降だったのです。要は、近代が合体するという話だったのに、結局、その前振りの第0章みたいなのが異様に教科書は長くて、近世から学ぶことになっている。近世以降、日本史も世界史も両方やらないといけないという、そういう時代になりました。それが②と③なのです。

それから、社会科の中では地理が約50年ぶりに必修科目になった。地理というのは、地理が、久々に必修化になったのが①です。それから、あと公民という科目が、現代社会という科目はこれまであったのですが、公共という新しい名前が変わります。その公共が、これまでの現代社会、要は公民の基礎みたいなもので、それプラス倫理か、それプラス政治経済かという受験、④と⑤というような形になる。

あと、裏技として、基礎科目である公共と歴史総合と地理総合を足して受験するというやり方もあります。などというふうに、社会科が、実は4月の高校3年生から大変革の時代になってくるので、大人の人は、結構、もう逃げられなくなってくるのは、自分より若い世代が会社とか役所に入ってきた時に、いろいろな話をされても「いや、自分は日本史選択だったので、世界史、分からないんだよ」とか、例えば、「いや、地理はちょっと関係ないんで」とか、それ言えないです。全部必修になっているわけですよ、ね。こういう時代が来ますよ、というのが、まず一つ目の話題提供です。

4. 生涯学習

それから、私は早稲田大学教育学部の生涯教育学専修というところに行って、卒業をしたのです。「43歳で行って、49歳で卒業って、ちょっとおかしくない？」というふうに、いま思われたと思うんですけども。私は、1972年（昭和47年）生まれ。「大学はレジャーランド」と呼ばれている時代の男でございまして、余裕で4年で卒業できるだろうと考えました。そうしたら、びっくりすることに早稲田大学、中国語の試験が1点足りないという理由で、私を卒業させなかったのです。そう。しかも情けないことに、私、卒業の時に早稲田大学の教育学部の代表として写真とインタビューがあって、卒業の時に6万人に配られるパンフレットの、早稲田は看板学部が政経学部、次が法学部と学内ヒエラルキーがすごいので、教育学部というのは、結構、下の方なのです。なのにも関わらず、私は年長の卒業生だということで、冊子の一番先頭に出ることになっていた。写真も撮り、インタビューも受け、全部整っているにも関わらず、私が卒業できないという前代未聞の事件が起きてまして、びっくり仰天でございまして。慌てて大学の広報部はどうしたのかというと、私の写真とインタビューの部分を大隈講堂の写真に切り替えるということになって、それが6万人に配られる予定だったのですが、コロナで卒業式が飛びまして、配布が無しになったので私は恥をかかないということになった。いま、でも、こうやってネタで言うことになるわけですけどね。

甘くなくて…、昨今の大学って、やはり厳しくて「文系だから余裕」みたいなことは全然ないんですよ。1点足らずで落とされて留年して、そしてその翌年は、ちょっと頭にきたので休学しまして。それは全部オンデマンドの授業になって、「これで施設利用費取るのかよ！」みたいなことが大学生たちもすごく不満があったので、ということで1年休学しました。それで、全体で6年かけて卒業するという形になったわけです。その生涯学習って、リスキリングとリカレントが、結構、混ぜこぜになっているのです。リスキリング（※reskilling）というのは、re-skillであって、企業の中の話ですよ、基本的には、スキルを、パワポがどうだとかなんとかかんとかという、そういうスキルの話をしているわけであって、役所や企業内の話です。リカレント（※recurrent）というのは学校の話であって、これまでのフロントエンド方式、若い時に学んで、その後働いて、最後、カルチャースクールに通うみたいなような感じ。真っ直ぐストレートなフロントエンド方式に対して、いつ何時でも学校に戻ってきても良いですよという、グネグネと蛇のような、グルッと、こっち、学校に戻ってきて、また働いて、また学校に戻ってきてと。私は、だからリカレントを自分で体現しているような状態なわけです。

5. オンライン動画授業

それから、生涯学習と生涯教育というのは、受け手と送り手の違いだなというようなことを自分は思っているので、話題提供にしておきます。私は一応、オンライン動画のプロ講師ではありますが。東進ハイスクールとスタディサブリの講義、通年でテキストも作ってやったことがある人というの

は、日本で僕しかいないのです。実は、東進とスタディサプリというのは、要は、オンラインの2本柱みたいなことを言われているプラットフォームになっているわけです。両方経験したから分かりますと言えば分かるのですが、実は、オンラインの講師は、みんなオフラインの方が好きです。オンラインが好きでやっているわけじゃない。本当は、オフラインの方が好きなのです。でも、そういう建て付けだから、そこでやる。それは政治家の人たちが、選挙演説の方が、握手したりする方が得意なのに、政権放送をやるのと一緒です。あまりお上手ではないですよ、正直。政見放送って、マック赤坂の方がよほど上手なわけですよ。そういうような感じになって、あまり得意ではないわけです。プロだとは言われているけれど、得意ではない。

ただ、思うのは、だから（オンラインは）オフラインのアンチテーゼでは全然ないのですよね。メリットが、オンデマンド制ですよ。それから倍速視聴などのタイパ（※タイムパフォーマンス）です。私、スタディサプリの生徒さんが、この中に座っているのだったら、「え？ 賀一先生、話すの遅くない？」というふうに、いま思っていると思う。なぜかという、スタディサプリ、みんな倍速で見るからなのです。倍速、当たり前時代です。タイパです。

それから、コスパです。めちゃくちゃ安い。スタディサプリは、私の住んでいるさいたま市においては、年間500円です。実は、1ヵ月、50円かからない。教育委員会越しにドンと入っているからです。うちの娘も学校で入っている状態なのです。もう1ヵ月、50円かからない。コスパがめちゃくちゃ良いわけです。もう、ほぼサブスクですよ。だからこそデメリットもあるんですけども、強制力が緩いのです。だから、モチベーション管理の武田塾みたいなものが出てくる、簡単に言うと、モチベーション管理をするものが、商売として成り立つということです。それか、気分の問題というか、やはり生の方が入ってこれるとか、そういう気分の問題が乗らないとやはりいうのもある。やっている側もです。これは、講師側もそう。難しいところがあります。

あと、独特のデメリットとして、私はサブスクの人だと思われるから、70何冊と本を出しても、なかなか買ってくれない。「賀一先生って、タダやろ？」ぐらいに思われている。ユーチューバーみたいに思われているわけであって、「課金しないよ」というふうに思われてしまうというようなことがある。これが三つ目。

6. 可能性の拡げ方

最後です。私、これまでどんどん職業の幅を広げていきました。プロレスのリングアナウンサーとか、ラジオのパーソナリティとか、あと、今度、テレビのレギュラーに4月から決まったので、また出るようになります。他にも、いろいろなことを実はやっておりまして、可能性を広げるときに、実は、僕は地上戦だと思っているから、1マス横のことしか絶対やらないです。1マス飛ばしでやると「えっ？ あいつにそんなこと言われたくない」「何で、あいつが語ってんねん」と言われてしまうのですよ。だから、1マス横のことしか絶対やらないというようなことです。「然るべき人材か？」という部分で受け手に疑問が発生する。

私は1冊だけビジネス書を出したことがあるのですが、「お前がビジネスを語るな」ということで、重版にならなかったそうなのです。ところが、日本史の講師なのに世界史の本を出したら、ギリギリ売れるのです。隣のマスだから、というようなことは、あります。

それから、あとこれは、あくまで仕事の場合であって、お客相手だと、そもそも好き・嫌いより向き・不向きの方が大事だったりするというのは、後で少し対談の時に出てくるかも知れないので、その時に話します。

あと最後の最後に、全員行くわけではない高等教育。いまでも4年制大学の進学率は、55%です。

北海道においては、もっと低いと思うのですが、皆さん、結構、特別なことをやっていらっしゃるの、レールに乗っているわけではなくて、そこは空中戦だなというふうに思っていて、滑走路だと思っています。なので、私は地上戦と言っているのはもう大人だからであって、皆さんは、たぶんどこかに落下傘で降りることになります。要するに、これから、空中戦を、いま展開している状態で、どこかに着地してから、隣のマスを意識しながら仕事をしていくという、そういう岐路に立たれているのではないかなと思います。

というふうな四つの話題提供をしておいて、岡田先生に譲りたいと思います。ありがとうございます。

